出会い　ふれあい　助け合い

サロン・あべの

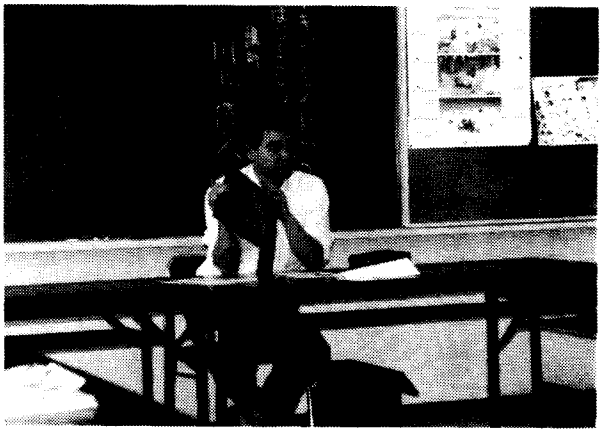
＜サロン・あべの＞NO．37　　平成　元年　7月15日（土）発行

＜サロン・あべの＞六月の出会い

トーキングエイドからはじまるコミュニケーション

梅雨の晴れ間の恵みを受けて＜サロン・あべの＞六月の出会いは、平成元年六月十七日（土）午後一時～四時に育徳コミュニティセンター研修室において開催された。

今年度は、コミュニケーションをテーマにして種々計画をたてている。一般的なコミュニケーションと言えば「言葉」のやりとりから始まるが、その「言葉」の表現方法となれば、音声と手話が識られている。しかし、その手段を持たない障害者（主に脳性マヒ障害者）は、どのような方法で自分の意志を伝えているかと言えば、ひらがなの〃あ・い・う・え・お〃五十音と数字が書かれた文字板を利用して、一字ずつ指で差しながら「言葉」を作り、聞き手に伝えている。当然の事としてそれを今まで見聞きしていたが、この文字板を音声発生装置の機器として開発された方がおられると聞き、お話を伺いたく＜サロン・あべの＞にご出席をお願いした。



快諾下さった川上博久氏は、大阪府立身体障害者福祉センター・リハビリテーション工学室で電子工学をもとに障害者の為の種々の機器の研究をされている。障害者と指導や介助をされる職員双方の立場を客観的に観られる位置におられ、そこから文字板の音声化であるトーキングエイドが生れ

てきたとのこと。その過程のご苦労と喜びを率直にお話いただいた。

○トーキングエイドの誕生

十年前に府の福祉センターに就任。電子工学の技師の立場から、著しく開発されてきたマイクロコンピューターを利用して障害者の為の道具作りを考えた。センターのケースワーカーに何が一番困っているかと問ねたところ、文字板を使ってコミュニケーションをするのが大変。時間はかかるし、気分的（集中力がいり精神的緊張）にも負担を感じているという。そこでニーズのあるシーズ（物）を作ってみようと考えた。同じセンターにいる脳性マヒ障害者二人に毎週研究室の方へ来てもらい、協力してもらうことになった。

初めの頃は、長音と短音の組み合わせをしたモールス信号と手旗信号の手法を合わせた符号方式を考えたが、半年程して二人の内の一人が、「協力してやっていきたいが、自分には覚えられない。残念だけれど止める」と言われた。今は使いにくい機械だけれど、将来は使ってもらえる物を作ることを約束した。残った一人が作業を覚えカタカナ文字が出てくるようになったが、その日の体調により出来、不出来があった。

これでは、文字板の嫌いな人や体調により使えないことになる。残った彼は、体調の悪い時、パソコンを使っているのを知った。それで、大前提は使いやすさだと気がついた。キーを押して文字が出るようにするのがよいと考える。その後、車イス市民集会の「言葉とコミュニケーション」のパネラーになり、多くの脳性マヒ障害者の声を聞いた。

携帯用の声の文字板が欲しい・言葉がたまっていくのが欲しい・キーボードを大きくして欲しい等々。

初めは鉄の箱で重いし、使用するのに準備時間が三〇分もかかったりしたが、昭和五六年より試作を繰り返し昭和五八年に出来た大四試作装置が身障者福祉センターでの開発の限界と考えられたので、使用する上でどのような操作ミスが多いか、どの機能をよく利用するか等、長期の試用を通して観察し、ナムコ社の協力を得て昭和六〇年量産化のモデル機器が試作され、トーキングエイドとして発売されることになった。

○トーキングエイトの概要

外寸法…B五程度（W二七×D二二・五×H五五センチ）

重　量…約一キログラム

表示部…液晶（二五六×六四dot）

音声合成…二〇〇mw

充電式電池内臓・プリンタ出力付

CP者（脳性マヒ障害者）のための福祉機器としての仕様としては、小型化・軽量化を図り、CP者のポインティングに十分なサイズとし、すべての操作が指一本で行なえるようになっている。又、便利な機能が用意されているが、利用者の能力に応じてシンプルに扱うことが出来るようになっており、不合理な機器動作が生じないようにし、解りやすい機器になっている。

基本的な機能は、次のようになっている。

1．専用キーボードにより、一六字×四行（最大六〇字／ページ）の文章を作成できる。

2．各ページは、電池のON/OFFにかかわらず保存され、五ページまで利用できる。

3．作成した文章をまとめて発音させることができる。

4．ひらがな・カタカナ・数字・漢字五〇種・シンボル五〇種が使用できる。
5．発音と表記が異なる文字とカナ文字について、専用キーを用意されている。
6．数字列は先頭が0以外であれば、位取りを調べ自動的に桁読み（八桁まで）する。
7．能率よく訂正できるように、カーソルがスペース・句読点までを単位に撤退するキーが用意されている。
8．登録語句を呼び出して利用することができる。言葉のポケット機能がある。例えば、表示が「あした■」となっている時、ポケットキー「★」を押すと「あした　★」となり、「ふ」のポケットに「ふくし　センター」と登録されていれば、続けて「ふ」と押すと作成中の文章に追加されて「あした　ふくし　センター■」となる。
9．作成中の文に影響を与えずに、「はい」「いいえ」を発音する専用キーが用意されている。

○エピソード

トーキングエイドを利用して一番喜んで下さったのがその家族と、関係者。多くの声が届くようになった。「娘がこんなに、おしゃべりだとは思いもしなかった。今までは、文字板を見ての会話だったが、今は後ろを向いていても話ができるようになった。」「子供の考えがよく解るようになった。」「テレビを観ながら、話ができるようになった。」

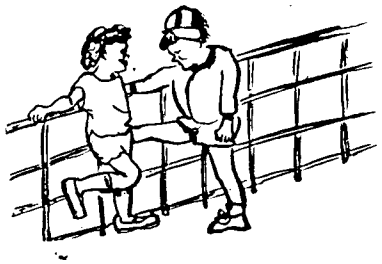
又、ある施設に居る女性が足でトーキングエイドを利用して五九才にして初めて「お母さんにあいたい」と言葉で表現したという。そして、トーキングエイドを利用して詩集まで作られたとの話を聞いて、道具は使い方次第だが役にたつ物を作れたことが嬉しかった。

又、このトーキングエイドは視力障害者と聴力障害者とのコミュニケーションをも実現出来る。視力障害者がキーボードの配置を覚えて文章を作れば、聴力障害者が表示を読み取ればいい。多いに活用して多くの人達と交流を図って欲しい。

コミュニケーションは言葉のキャッチボールであり言葉の継続が大切であるとおもう。得て、不得手はあると思うがトーキングエイドを活用してコミュニケーションを豊かにしていって欲しい。

実物のトーキングエイドを見せていただきながら、伺った話は文字板の音声化という機器の話ではなく、人と人を結びつける温かい体の一部分としての補助具に思えた。が、この「トーキングエイド」日常生活用具に認定されていないとのこと。ちょっと残念な話である。

この日の参加者は、一七名。トーキング以外の質問にも快よく答えていただき、感謝しつつ会を終った。司会は山本篤江さん



インタビュー

トーキングエイドは ずいぶんコンパクトに なったものです

トーキングエイドの開発改良に、使う人の立場から縁の下の力もちをしてこられた南光龍平氏にいろいろおうかがいした。

―　おいそがしいのに、押しかけインタビューしてすみません。早速ですが、トーキングエイドの改良の片棒をかつぐようになったキッカケはなんですの…

南光　全国車イス市民集会が一九八一年大阪で開催され、その時分科会の一つに「言葉とコミュニケーション」というのが新しく出来たのです。言語障害を持っている障害者のコミュニケーションについて、話しあっていこうということで発題し、その時の司会がボクでした。川上さんがそういう機械（トーキングエイド）を研究されていると聞いて、パネラーとして話をお願いしたのです。その時にね、集会の打ち合わせでセンターにお邪魔してあれこれやったのがキッカケです。

―　その時は、研究開発に入ったばかりだったのですか。

南光　研究は一九八一年以前よりされていましたよ。当初のトーキングエイドの大きさは、パソコンの大きさか、ラジオのスピーカーのような大きさで、ちょうど事務机の上いっぱいを占領して、とてもまだまだ実用段階ではなかったです。今やったら、持ち運び出来る大きさだけどね。

―　そうですかー、そんなに大きかったんですか。それにしても、ずいぶん小さくなったものですね。

南光　おととしの静岡での市民集会で、ボクがパネラーを引き受けたのですが、その時に他の県から来た人がトーキングエイドを使っているのを見て感動しました。研究改良の段階から知っているので、ここまで実用化出来た機械を見て、よう作ってくれたなーと感慨を深くしました。

―　試作の過程でどんな要望を出されたんですか。

南光　いろいろ注文しました。机では持って歩けませんでしょう。だからまず小型化。それに今はいくつか文章がつながっているけど、その時はなかったので、それも…。

―　考えてお願いしたことが、全部入れて下さったわけですね。

南光　ええ、正直いってこゝまでのものに仕上げてくれはるとは思わなかったです。（笑！！）

おこられるから、ここんとこカットしてください。（南光）

―トーキングエイドを、使う側からみたのと聞く側からとではどうですか。

南光　ボクは実際に使っていない。集会の場所で問題になったことなんですけど、トーキングエイドが出来て便利になったけど、名前を言うのもそれを使うのは、どうかと思います。発言出来る人は発言しないと、生の声を聞くのが大事なことですよ。そういう姿勢がお互いに理解を生むわけで、機械ばかりに頼っていては、コミュニケーションは深まっていかない。人間関係はうすくなると思う。表面的な人間関係になりやすいね。

―よそゆきの言葉で話すということで、温かみがなくなるのでしょうね。

南光　トーキングエイドを使うと誰でも聞けるから、本当に必要な人にとっては大切な機械です。言語障害の人は神経使って言うけど、聞く方は初めから、この人の言葉は解らない、言語障害があること、イコール全く言葉が解らないという先入観をもたれるのも困ります。このこともあってついつい機械に頼るというきらいは確かにあります。本当は解るのに。コミュニケーションを深めればね。利用する側の姿勢も必要ということですね。

―そうですがね。こんなこともあるんです。言葉が不自由ということは、耳が聴こえないと思われていることも多いんです。言うのが無理な人は聴くのも無理と考えるらしい。ボクなんかでも、相手が耳元に口を持ってきて、しゃべってくれる人がいた経験があります。音に弱いので飛上ってしまう。普通でも弱いのに、特に突発的な音にはね、電話のベルなんかでも。

―普通にしゃべってくれた方がよく解るのにね。

南光　すごい思い込みですね。結局、耳と口がイコール悪いと思いこむ人がいるのです。聴く障害があると思われているのは意外でしょう。だから、ついつい使うのもわからんではないです。

―トーキングエイドの改良したら、いいと思われるところを…

南光　今の物より、もうちょっと小さくな、ったらもっと便利やと思います。それと大分人間の声に近くなっているけど、まだまだ機械的な声なので、声がね。

―若い人と老いた人の声があったら楽しいでしょうな。

南光　合成音で、本人の声を作ってもらえたらいいですね。

―面白いけど、そこまでぜいたく言うたら怒られるのと違うか。

南光　最後に。

―まだまだ文字板使っている人が多いから、慣れると文字板は早いけど、読み取るのが難しいので、どうしても必要な人には使って欲しいね。皆んなが使うようになったら、もっと良いのが出来ると思うし、コストも安くなるやろしね。

―それには、早く生活用具として認められるようになって欲しいね。

お風邪のところ、どうも長いお話ありがとうございました。早く風邪を治して、例会におくさんといっしょに来てください。

（インダビュアー　冨田慶子）

サロン・あべのNO・35の上平幸雄さんの原稿を読ませていただきました。私も足が不自由なので（車椅子は使っていません）自動車を足替わりに使用しています。私はハムをしていますので（ハムと言っても食べるハムではありません、Ｈａｍ・アマチュア無線のことです）常に誰かとコミュニケーションが出来る様になっています。煩わしい時は電源スイッチを切っております。

私が始めた頃は送信機も受信機も手作りでしたが、今では何社もの会社がアマチュア無線用の送受信機を製造販売されていますので、手軽に始めることができます。但し免許が必要です。

始めたころは固定局（家の中に設置・一定場所から動かせない）でしたが、昭和四〇年代からモービルハム（自動車に設置・移動しながら交信）が増えて来て、私も現在迄ほとんどモービルハムを中心に楽しんでいます。固定局も楽しいことが多くあります。北海道や九州の方々との交信や、地球の裏側からの交信もなかなか楽しいものです。家の中に居ながら各地の話題も聞かせてもらえますし、天候の移り変わりもよくわかります。

モービルハムも、車の渋滞状況や道に迷った時など聞けば教えてくれる人も多くおられます。特に地方に行った時など、親切な方が多くおられて、裏道を誘導して下さったりすることが多くあります。私のように両下肢の障害者にとっては、非常に有難いことです。

又、友人とのドライブ等で山道を走っていても、対向車を知らせてくれますと、狭い道路やカーブの多い所などでは、安全運転に非常に助かりますし、前行車との距離もよくわかります。ガソリンチャージやトイレ・故障等の時にはすぐに連絡が取れて楽しくドライブすることが出来ます。更に一人で運転していても、無線が有れば誰かが聞いてくれていますので、何か有った時には心丈夫です。

ハムで拡がるコミュニケーション

山梨　徳治

その外に無線を持ったメンバーで、ボランティア活動をしています。

日本赤十字社大阪府支部機動救助奉仕団（隊）役員として頑張っています。大阪府を中心とした地域に大きな災害があったときに出動します。又、大阪府・市の防災・震災等の訓練の参加や御堂筋パレード・郵政省簡易保険主催の健康マラソンの救護班として出動しています。現在大阪の奉仕団メンバー三〇人の中に身障者は私だけですが負けずに活動しています。更に、アマチュア無線のクラブ（関西シークレット・ハムクラブ会員六〇人）のメンバーとして（顧問）無線でコミュニケーションを満喫しています。

皆様も特に下肢に障害のある方は、便利ですからハムを楽しんでみませんか。現在ハムをお持ちの方もお空（無線電波）でお会いする日を楽しみにしております

現在144MHz(メガヘルツ)と430MHzで運用しています。

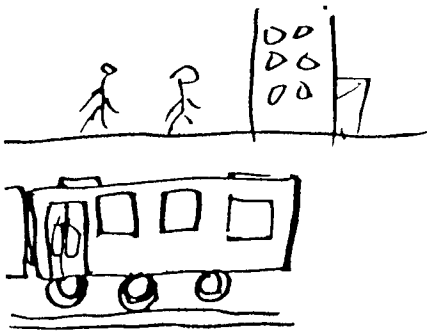
近々1,200MHzでも運用しますので宜しく。

de　ＪＡ３ＡＵＪ

（アマチュア無線局の呼び出し符号）

コミュニケーション拒否症候群 ③

上平　幸雄



ぼくは他人とケンカをしたことがありません。人間ですから、もちろん腹の立つこともあります。『コノヤロー！』と思うこともあります。でも、ケンカにはならないのです。何故なら、ぼくが黙り込んでしまうからです。

ケンカというのも、コミュニケーションの一つに考えられると思います。暴力は別としても、口ゲンカなどは自己表現の最も高度なものであると思います。相手の話を本当に聞いているかどうかは疑問ですが、お互いの気持ちをぶつけあうのですから。

そのケンカができるくらいなら、普段のコミュニケーションも、もっと上手にできると思うのですが…。黙るというのも、自己表現の一つかもしれませんが、要するに、自分の考えや気持ちを、うまく言葉にして表現できないのです。

言葉がうまく出ないのは、程度の差こそあれ、普段からそうなのです。特に別れ際の一言が出ません。心の中では、きちんと挨拶しているのですが、つい「どうも…」としか声になりません。何でもかんでも、「どうも、どうも」で済ませてしまっているような気がします。

この「どうも…」という言葉は非常に便利ですが、「どうも」に続く「…」の部分を相手の想像に任せているだけなのです。不思議なことに、たいていの場合は、それでも十分に話が通じてしまうのです。しかし、それをコミュニケーションと呼べるのかどうかは疑問です。

この「どうも…」に近い使い方をする言葉で、車椅子で外出した時に気になるのが、「すみません」です。

車椅子で人ごみの中を通るときには、「すみません」の連呼になることがあります。別にあやまっているのではありません。「すみませんが、通して下さい。」の意味で、丁寧にお願いしているだけなのです。でも、何かこちらの方が、悪いことをしているような気分になってしまいます。

「ありがとう」の代わりに、「どうも」や「すみません」を使ってしまうこともよくあります。ぼくの場合、言葉がうまく出ないこともありますが、日本語が正しくしゃべれないのかもしれません。自分自身の考えや気持ちを、言葉にしてもう少し正しく表現できるようになれば、人とのコミュニケーションも、もっと楽しいものになるのかもしれません。

まちづくりのはなし（6）

第五話　世の中基本が肝心です

原田　仁

まちづくりというのは街を作る（造る・創る）って言うぐらいですからやっぱりたいへんなわけです。時間もお金も人材もうんといるわけで、じっくりやらないとお湯をかけて三分というわけにはいきません。

それをより良く、より効率的に、多くの人の意見を取り入れてやるために計画というものが必要になり、実に多くの計画というものが決められ、実行されています。

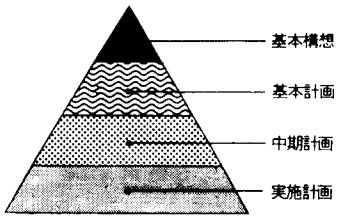
まちづくりは住民と行政と企業や公共団体などが一緒になってやっていくもんですが、その中心となって取りまとめていくのはやはり地方自治体です。だから、大阪市をこれからどうしていくかということを決める計画というのが基本になるんです。

「基本構想」はまちづくりの理念（将来のあるべき姿ってところです）を、「基本計画」はあるべき姿を実現するための大まかな方法を長期的に示したものです。

で、「中期計画」や「実施計画」でそれをもっと詳しく具体的にしていきます。

つまり、まずは基本構想や基本計画がまちの方向を決めてしまうということでとっても大事なのです。これにこちらの意見をどれだけ入れていけるか。ここをみんなでじっくり話し合うことが必要なんです。

いま大阪市では新しい「大阪市総合計画」を作っているまっ最中です。



おしらせ

＜サロン・あべの＞八月の出会い

日時　平成元年八月一三日（日）午後

場所　工芸高校グランド

［阿倍野区役所　阿倍野区文の里一－一－四〇の裏］

内容　あべのカーニバル会場内

なんでも市にサロン店参加

＊皆様との出会い、ふれあいを楽しみにして、お待ち申し上げています。

問合わせ　電話：〇六－六九一－一〇二八

（冨田慶子）

＃感謝します＃

カンパ・レポート用紙・第五回大阪市リハビリテーション市民講座記念冊子・バザー用物品など、ご協力ありがとうございました。

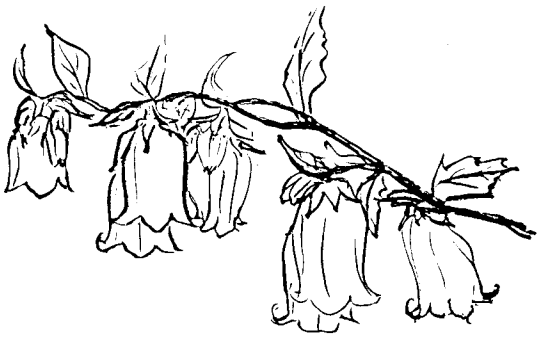
お礼を申し上げます。

六月のカンパ合計五三、〇〇〇円

岡崎・柿岡緑・川上博久・つくし会（代表米田祝子）・出口正敏・中川・中野君江・匿名一名

（敬称略）

旭　純子



ろうあ運動の現況

五．今後の課題（1）

ろうあ運動において解決を要する課題は聴覚言語障害者総合センターの建設、手話通訳制度の確立、道路交通法八十八条の改正をはじめ、これまでみてきたように多岐にわたっているが、「ろうあ者」のみでなく、「通訳者」に関連する要求、そして「ろう障害」を含む「重複障害者」の運動へと拡大し、「権利追求と獲得」に終始せず、文化芸能活動の育成を通じて主体的に社会参加を図り、ひいては全国民の願いでもある「世界平和」に貢献して国民運動との連帯を図る方向を打ち出している。これらの運動が総合的に発展し、「ろうあ者の生活と権利保障」が国民の生活保障にまで止揚されて実現されることを望みたい。

「身体障害者福祉法」は第二条において「すべて身体障害者は自ら進んでその障害を克服し、その有する能力を活用することにより、社会経済活動に参加することができるように努めなければならない」「すべて身体障害者は、社会を構成する一員として社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に参加する機会を与えられるものとする」とし、障害者の自立への努力の必要性と社会参加の促進をうたっている。わが国の障害者観は、「権利保障」の観点が欠落しているといわれたが障害者の要求運動の成果として昭和五十九年の改正により、社会参加の機会が与えられることとなった。しかし、法の理念と実際の対応には矛盾があり、これらの理念が福祉施策に十分反映されているとは、未だ言い難い感がある。

――第二回ボランティアの集い――

平成元年六月二四日（土）午後一時三〇分～四時三〇分、育徳コミュニティーセンター研修室に於て「第二回ボランティアの集い」が開催された。

この日は植松氏の担当で「ビデオでの学習会」をした。過日テレビで放映されたおふくろシリーズ「おふくろに脱帽」を観賞し、身体障害者の社会参加と自立について、それぞれの感想を交え話あった。

サロン・あべのより三名参加。

＊第四回ボランティアの集いのご案内

日　時　平成元年八月十三日（日）
　　午後三時より

場　所　工芸高校グランド「阿倍野区役所裏」あべのカーニバル会場内

内　容　1．ボランティア体験コーナー
　　（車イス・手引等）
　　2．ビデオ、映画コーナー
　　3．あべのボランティア・ビューロー相談コーナー
　　（企画案）

なんとかしてェ〜な

銀行の自動支払機（2）

大島　功

カード時代と言われている今日、私も幾枚かのカードを持っています。その中でよく利用するのが、キャッシュカードとクレジットカードです。どちらも視力障害者にとって、慣れる迄使いにくい物ですが、行く場所を覚えてしまうと便利です。特にクレジットカードは現金の受け渡しが無くて重宝しています。キャッシュカードは、原則として利用は銀行の開店中に行内でフロアーマネージャーの人にお願いをして自動支払機より引き出してもらっていますが、うっかり忘れて時間外に引き出さなければならない時や、他の地域やなじみのない銀行に行った時が困ります。各銀行、場所により自動支払機の操作ボタンが違っているのです。見えない者には、覚えていない順序操作は使えません。が、そのときはそのとき通りがかりの人に頼みます。全面的に相手の人を信用し、引き出しをお願いしています。同じカードを利用している仲間意識と信頼感を持っていますので、不安感はありません。

型は違っていても操作は同じとなっているプッシュホンの電話器や、カナタイプのように銀行の自動支払機の操作も規格化して欲しいと思います。

それにしても、視力障害者が利用しやすいよう「なんとかしてェ〜な」と思います。

（談）

＊＊点字シール配布

視覚障害者食生活改善協会＊＊

東京にある視覚障害者食生活改善協会は、視力障害者に健康で豊かな食生活を実践していただきたいと、食生活に関するホットな情報を提供しているボランティア活動団体です。この協会が此の度、視力障害者に缶詰用点字シール（缶詰の中味を書いたもの、サバ・イワシ・モモ・ミカン等）と電子レンジ操作用点字シールを無料配布されています。希望される方は左記までお申込み下さい。

又、同協会の事業として月刊テープ雑誌「声の食生活情報」を発行されたり、各地域で電話による「献立ヒントの電話サービス」を設置されています。月により、週により献立内容が変わっています。夕食のおかずに困ったら一度聞いてみて下さい。

大阪の電話番号は、

☎〇六－四五五－四四〇〇です。

点字シール申込み先の住所

東京都港区麻布大一－九－一二飯倉大ビル

視覚障害者食生活改善協会（〒一〇六）

六月の雨

編集後記

真っ暗な戸外に一歩踏み出した途端、道路が大きく波うっているようで、どこへどう足をおろしてよいか見当もつかず、体の安定を失い大きく左右に揺れ、何がなんだかわからなくなり、余りの恐ろしさに急いで明るい家の中に引き返したという耳の不自由な人の話を読んだ。

暗やみの中で聞えない人が行動に不自由するのは、周囲の音にたよれないこともあるだろうが、もう一つ、耳の障害の他に平衡感覚にも障害が生じることがあり、歩きずらくなったりする。とも書いてあった。

（石）

＜サロン・あべの＞第３７号
発行日　平成　元年　７月１５日（土）
発行・編集＜サロン・あべの＞運営委員会
［大阪市阿倍野区阪南町6-3-26
電話(06)691-1028冨田慶子］
印　刷　セルフ社　電話（06)691-2365
［阿倍野区西田辺２－２－１０
グレース鶴ヶ丘１０１号］
定価　￥６２．